

芒種の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員に於かれましては、益々ご清福の段、大慶至極に存じ上げます。

皆様には日頃より当支部運営に際して特段のご高配を賜り、深甚なる敬意を表すと共に、倍旧のご支援を伏してお願ひ申し上げる次第です。

過ぐる五月十五日は沖繩祖国復帰四十周年の記念日であり、沖繩各地で記念行事が盛大に開催されたTVニュースや新聞記事を目にした事かと存じます。

昭和四十七年当時、私はボーイスカウト活動に没頭していた高校三年生で、同年八月沖繩BSの米連盟極東支部から日本連盟への移行記念行事参加の為、同県北部の本部半島米軍サイトに一週間のキャンポリーを楽しみました。

未だ車は右側通行で、米軍放出品の店で羽毛シユラフを四千円で購入した際、店員がお釣りの計算にえらい手間取った事などが懐かしく想ひ出されます。

ベトナム戦争華やかにし頃の四十年前、ダウンシユラフなどは大変珍しく、宮崎のBS仲間自慢していた処、米軍は戦死者を一旦寝袋に包んで沖繩まで運び、そこで棺に入れ替えてから米本土へ空輸するらしいぞと脅かされました。

ところで昭和二十年三月、慶良間列島に上陸した米軍は戦争終結を待たず、ニミッツ布告の第一号で、奄美を含む北緯三十度以南の南西諸島に於ける日本政府の行政権停止と同時に、米軍政の開始を宣言したそうです。

米軍は住民に戦没者の慰霊に関わる全ての事を禁じていた為、終戦から一年経過しても戦没者の遺体は収容されず、あちらこちらに放置されたままだったようで、特に激戦地であった嘉数高地などでは村人達が昼間の作業の合間に、空の弁当箱にこっそりと遺骨を収集したとの伝聞も残っています。

心ある沖繩県民は粘り強く米軍と交渉し「魂魄の塔」などの慰霊碑を建立し、戦没者の慰霊を続け乍ら祖国復帰運動を始めたそうですが、東西冷戦激化の中、米軍戦略上の要石としての沖繩は、巨大な軍事基地化への道を辿りました。

更に昭和三十一年のブライズ勧告による一括払いの軍用地接收は「日本国土の買い上げに等しく、又植民地化への布石ではないか」との疑念を沖繩県民に抱かせ、これに反対する土地闘争が全島的に展開されたとの記録等もあります。

私が陸自に入隊した昭和四十八年三月隊員同期の二割強が沖繩要員であり、昭和四七年十二月から平成二十二年三月迄に、七、七四七件・八、一〇一人の緊急患者輸送と、一、六〇九屯の不発弾処理を実施した陸海空自衛隊は、多くの沖繩県民から信頼や感謝を寄せられていると仄聞するところです。

国土の僅か1%弱の島に七割強の米軍基地が存在する現状をいつまで放置、容認するのか、憲法改正も睨み、国土防衛や東アジアの安全保障をも包含した国民的議論とその覚悟が、今我々に求められているような気が致します。

平成二十四年六月一日

宮崎県防衛協会

青年部会

宮崎支部長

小倉和彦

